

「遠い親戚より近くの他人。遺品整理の仕事に取り組み始めて、この言葉がつくづく身に染みますね」。亡くなつた人の遺品整理に2年前から携わり、民間資格「遺品整理士」の県内第1号となつた長澤運送(天理市西長柄町)の長澤運昭さん(67)は、仕事を通じて人と社会のつながりの希薄化を痛切に感じるようになつた。

独居高齢者や孤獨死、自殺…。「無縁社会」という新語も登場する現代社会で、遺品整理という仕事の需要は高まる一方だ。しかし、法律や明確な基準がないため、遺族など依頼者に対しても業者が高額請求したり、遺品を不法投棄するなどの問題も顕在化してきている。

そこで、遺品整理を担う運送会社や廃棄物処理会社などを対象に昨年9月、一般社団法人「遺品整理士認定協会」

「遺品整理士」県内第1号

長澤運送社長 長澤 昭さん(67)



「ああ、良い人生を送られたんだな」と、ほっとした気持ちになりました」と語る長澤さん

(北海道千歳市)が発足した。社会のニーズに応えるため業界の健全化を目指し、公益性や認知度も高める資格を目指す方針だ。

遺品整理に2年前から携わった長澤さんは、昨年末に資格の存在を知り、今年2月、供養のあり方等をテーマにしたりポートで合格。奈良

人生最後の片付け

介護施設に入居する高齢者の荷物の整理や、孤獨死した人の遺品整理の必要性を感じ、良心的な価格で仕事を請け負

うようになった。自殺した人の遺品整理、遺族と家主との金銭トラブル、足の置き場もなく葬式も上げられないほど、ごみが散乱している家の整理など。2年間で約200件の遺品整理の現場に立ち会ってきた。

「孤独死された故人の遺品整理でも、楽しそうに過ごしてきました写真など、人とのつながりが見えると『ああ、良い人生を送られたんだな』と温かく、ほっとした気持ちになります」

の地区統括会員として、後進の育成にも意欲的だ。運送業に関わるようになつて約40年。遺品整理という仕事を意識し始めたきっかけは2年前だつた。当時住んでいた奈良市の自宅近くに暮らす80歳代の男性から、介護施設に入居するため荷物の運搬・整理を頼まれた時だつた。

仕事をすべて終えてから、長澤さんは男性を自宅へ食事に招いた。「奥さんに先立たれ、家庭の味も忘れていたのでしょ。本当に感謝されて、施設に入つていかれました」。

遺品整理は、人間の一番弱い部分やプライバシーを見る仕事でもあるという。一概に

の育成にも意欲的だ。運送業に関わるようになつて約40年。遺品整理といふ仕事を意識し始めたきっかけは2年前だつた。当時住んでいた奈良市の自宅近くに暮らす80歳代の男性から、介護施設に入居するため荷物の運搬・整理を頼まれた時だつた。

「孤独死された故人の遺品整理でも、楽しそうに過ごしてきました写真など、人とのつながりが見えると『ああ、良い人生を送られたんだな』と温かく、ほっとした気持ちになります」

遺品といつても、遺族など依頼者に渡すべきものや、見せずに処分したほうがいいものなど、さまざまなケースのなかで判断していかなければならぬ。また、遺品整理といふ仕事は、向き合えば合うほど「採算の合いにくい仕事」である。

だからこそ、やりがいもある。「遺品整理は人生最後の後片付け、一番最後に見送る仕事です。遺族にも、最後につき合つていた近隣の人にも安心してもらうことが、故人の供養にもなります。依頼者からの感謝をエネルギーにしています。そのように遺品整理の仕事に向き合つていきた

無縁社会でも生きた証し